

# 吉本隆明氏をめぐるシン・ポ

## 「ご意見番」は真。ポストモダン?

### 眼 単眼 複眼



吉本隆明氏

評論家・吉本隆明氏の「ご意見番」的な活躍が続いている。77歳。なぜ今さら? そんな声も聞こえる中、新説が現れた。「吉本氏は『真の』ポストモダニスト」。あるいは、そうなりうる可能性を持っていた。東京・大岡山の東工大で先月開かれた「吉本隆明をめぐるシンポジウム」は、約300人の聴衆を沸かした。

社会学者の橋爪大三郎氏を司会に、戦後思想に大きな力をもった吉本氏を解剖しようとの試み。文芸評論家の加藤典洋氏、哲学者の竹田青嗣氏、社会学者の大澤真幸氏がパネリストとして参加した。「新説」を出したのは大澤氏だ。ポストモダンといえば、日本では

80年代のニューアカデミズムが象徴的だったが、大澤氏いわく、実態はモダン。近代の「シニカル」な変形にすぎなかった。むしろ彼らから批判の対象にされた吉本氏こそ、近代に代わる価値体系を作るべく格闘してきた、という。

例えば「マチウ書試論」(54年)で示された「関係の絶対性」。権力や秩序に加担したり反逆したりする際の正しさの基準は、立場や倫理でなく、人と人の

間の、どうにもならない現実の関係で決まる。そう主張した前提には、相対化の果てに絶対的な基準をなくした近代への疑問があった、と今では考えられる。一方、『共同幻想論』(88年)では、個人幻想と共同幻想の間に「対幻想」という第3の概念を作り、二元論できた近代を突き破ろうとした。消費社会論を経て90年代末の『アフリカの段階について』。ヘーゲルにもマルクスにもない「アフリカ的」という概念を打ち出し、文明史的に無視されてきた人間の精神史の原形を問いかけた。「天下の奇書。でも、モダン(近代)を乗り越えるための超越的な基準を探った姿勢が、貫かれています」(藤生京子)

「と大澤氏。全共闘の精神的支柱とされた吉本思想は、とかく狭い左翼運動の中で位置づけられがちだった。しかし一見ばらばらな「点」は、近代という枠組みを問う「線」となつて像を結ぶ。吉本氏の全盛期を知る他のパネリストらより一回り若い大澤氏ならではの視線だろう。「かなりおもしろい」(橋爪氏)、「納得できる」(竹田氏)と同意する意見が多かった。シンポでは、国家解体論をはじめとする吉本氏の主張は役割を終えたといった意見も出た。それでも「人は間違いうる」という敗戦体験を出発点に、独自の原理を確立しようとする今なお走り続ける吉本氏の姿勢に、参加者は大きな敬意を示した。「輸入学問」から脱皮していきなさいと自認するアカデミズム。吉本氏が過去の人になつていない理由を垣間見た気がした。

おまけ

#### テロリズムの定義

島田——二〇〇一年九月十一日の衝撃的な事件から九カ月が経ちましたが、そもそもあの事件を同時多発テロと呼んでいいのかどうか。その点が、テロの問題を考えるうえでいちばん難しいところではないでしょうか。攻撃を受けたアメリカの側

教学者の山折哲雄さんが参加され、あとエジプトとイランとマレーシアの学者の方が参加されていきました。私もオーディエンスの一人として話を聞かせていただきましたが、そのシンポジウムのなかで、エジプトから参加されたハッサン・ハナフイー教授(カイロ大学)が、「はたしてあれはテロだったのか」という問題提起をされました。

の議論にはならないと主張されました。これは、ハナフイー教授だけの特殊な意見ではなく、特に中東の地域では、九月十一日の事件をテロと呼んで糾弾することに対して批判的な人たちが少なくありません。九月十一日の事件を起こした側の実像は、これまでのところ必ずしも明らかになっていないわけ

# 宗小教

## 九月十一日事件はテロだったのか

二〇〇一年九月十一日の事件は、テロだったのか殉教だったのか。テロリズムの定義から始まり、国際社会におけるアメリカの立場とは何かを語る、社会学者と宗教学者の徹底討論!!

# 戦争

橋爪大三郎

島田裕巳

は、無条件でテロであったというところをえかたをしていますが、一方で、九月十一日の事件はテロではないと考える人たちがいます。たとえば、橋爪さんがパネラーとして参加された笹川平和財団のシンポジウム「イスラーム文明との対話」では、橋爪さんのほかに日本からは宗

これまでの中東がおかれた状況からすれば、アメリカがしてきたことの方がよほどテロということに値する不当なことであって、九月十一日の事件がテロであったかどうかを議論する前に、そのことを議論しなければならぬ。要するに国際政治上の支配の構造を問題にしないかぎり、本当

はありません。朝日新聞が「テロリストの軌跡——モハメド・アタを追う」(草思社)という連載を長期にわたって行なってきましたが、そうした連載を通して、事件の中心的人物とされるモハメド・アタがどういう人間であったのか、おぼろげながらわかってきました。ただし、本人は死

んでしまっているわけで、遺書は残っていますが、それは自分が死んだときの埋葬のしかたを指示したもので、いったいどういう気持ちで世界貿易センタービルに突っ込んでいったのかはわかりません。

九月十一日の事件の実行犯たちの内面を推測する材料となるのが、パレスチナで繰り返されている、いわゆる「自爆テロ」を実践した人々の遺書ですね。彼らは遺書を残していますし、場合によっては、自爆する前にテレビカメラにむかって心境を吐露しています。自分たちのしようとして行なう行為を、決してテロ、つまりは不法な暴力としては考えていません。彼らは、自分たちは、宗教的な意味での殉教をするのだと考えている。たとえば、二〇〇一年六月二十二日に、車を使って、ガザ地区で二人のイスラエル兵を巻き添えに自爆したイスマイル・マサワビという二十三歳の大学生は、次のような両親への遺書を残しています。「私は自らを犠牲にし殉教者になることを神に求めてきた。武器を手に我々の子を殺すユダヤ人と戦うことが義務となった。私が去ることは苦痛だろうが、神は私を天国で迎えてくれる。息子を殉教させてくれる神に感謝してほしい」(毎日新聞二〇〇一年九月二十五日付朝刊)

もちろん、アタがこの二十三歳の学生と同じ心境であったかどうかはわかりませんが、少なくとも、攻撃される側がテロと考えていることを、攻撃する側は殉教と考えている。そうした認識の決定的な違いがあると思うのです。

そうすると、私たちは同時多発テロということ

ばを当たり前のように使っていますが、そもそもあれをテロと呼んでいいのかどうか、一部には「九月十一日事件」と呼んで、テロとは考えないというものもあります。

オウムのことでは、オウムの起こした事件は「オウム事件」と呼ばれることもあります。いちばん多いのは「地下鉄サリン事件」という呼び方ですね。日本では一般に、事件が起こった場所を事件の呼称として使うことが多い。昔だと「三鷹事件」や「帝銀事件」がありましたけれども、企業が舞台になった場合は「グリコ・森永事件」と呼ばれる。地下鉄サリン事件は、あくまで地下鉄サリン事件であって、けっして地下鉄テロ事件と呼ばれたことはないと思います。

私の「オウム」(トランスビュー)という本の副題は、「なぜ宗教はテロリズムを生んだのか」となっています。私自身がテロということばを使っていますが、九月十一日のような事件が起こってみると、はたしてそれをテロと呼んでいいのかどうか。

テロということばを定義する試みもいろいろとなされてきているようですが、ある事件なり出来事なりを皆が一致してテロと規定することはなかなか難しい状況にあります。考え方や立場の違いによって、同じ事件をテロと考える人もいれば、そうではないと考える人もいるわけです。そうやっていくと、はたして私たちは九月十一日の事件をテロと呼んでいいのかどうか、それを議論する必要があるのではないのでしょうか。

橋爪——この議論は、そんなに難しい話ではない

と思います。

テロリズムの定義は、はっきりしている。テロリズムの定義ははっきりしていないという議論もありますが、そういう議論の動機やバックグラウンドははっきりしている。ですから、もって回っているいろいろな言わなくても、ストレートに話せるテーマだと思えます。

島田さんが言及されていた笹川平和財団のシンポジウムのときにも、「テロリズムとは何か」に関して、簡単に発言しました。また、その内容をかいつまんで、読売新聞のコラム「アクセスポイント2002」に「テロ相対主義の愚」と題して寄稿しました(二〇〇二年一月十八日夕刊)。要点を繰り返しておきましょう。

日本人は、人を殺すこと/殺さないことの間を線を引きながら。たしかにそこに大きな線があるんですけど、でもその結果、人を殺す「殺し方」にもさまざまな違いがあるということにあまり思いが及ばなくなっている。そのため、いったん人を殺すとすると、どんな殺し方でも似たようなものだと考えてしまいがちだ。伝統的にテロリズムを悪と考えてきた文化圏からすると、これは、すぐテロリストみたいな殺し方をしたり、テロリストに同情的になったりする傾向のある困った人びとだ、とみえてしまうわけです。

キリスト教をベースにする西欧文明は、テロリズムを憎むわけなんです。それはどういう考え方によるのか。

キリスト教の論理のなかには、隣人愛の要請と、それから、国家権力の承認(ローマ人への手紙)

でパウロが「地上の権威には従え」と述べている)とがあって、この関係が長いあいだつきりしなかった。「右の頬を打たれたら、左の頬を出す」というやり方では、国家権力を運営できません。スコラ哲学がどう考えていたかは、『神学大全』などに書いてあるのですが、読んでみてもどうも論理があいまいである。そこでスコラ哲学は近代国家を生まなかつたんですけれども、近代国家が生まれるにあたって、どこかに発想の転換があったはずだと考えて、ルターが書いたものを見ていたら、それと思われる箇所が見つかった。ルター(の樹てた学説が、キリスト教(特に、プロテスタント)の人びとに受容され、いまでは当たり前)の考え方になって広まっていると思うんです。

ルターは「存じのよう」に、すべての職業は「天職」で、神が命じたものである、だからどれも同じように尊いというふうには、世俗世界を神聖化するロジックをもたらしただけですね。聖職者だけが尊いわけではない。聖職者という存在自体を、彼は否定してしまいましたが、靴屋であろうとパン屋であろうと、農民であろうと、みんなその職業に従事することが神の呼びかけにこたえることになるという拡張した考え方を示した。

するとある軍人がルターに質問して、「もしも世俗の職業がすべて神の命令によるのなら、軍人も神が命じた正しい職業なのだろうか。私は軍人、すなわち、人殺しのプロとして、隣人を愛さなければならぬという神の命令に背いて、同胞を処刑したり、敵国人を殺害したりして日々悩んでいる」みたいなことを尋ねた。

ルターが答えて言うのには、「隣人愛を正しく解釈すれば、それは悩む必要がないと思う。もしあなたが剣を取ってそれに反抗するのなら、神の教えに背くことになる。イエス・キリストは、『汝を迫害する者のために祈れ』と教えた。しかし、あなたではなくあなたの隣人が敵に迫害されている場合には、話は別だ。それを見越すとすれば、あなたは隣人愛に背くことになる。隣人愛の原則から言えば、隣人が欲していることをあなたは行なわなければならない。隣人が犯罪者や敵国人に襲われて苦しんでいるときに必要なのは、剣を取って駆けつけ、隣人を迫害から解放してやることである。これこそ隣人愛の精神にかなっている」。だいたいこんなふうで回答しているわけです。これは、ルターが初めて編み出したロジックではないかと思う。

このロジックの転換によって、キリスト教の信仰と隣人愛の原則にもとづいて、警察権力と国家権力、軍隊の設立が可能になったわけです。こうして設立された国家権力と軍隊は、理由がよくわからないままいつの間にか支配権を握っている封建領主と違って、あくまでも公共秩序を維持するために、人びとの合意と契約によってその職業に就く、軍人やプロフェッショナルな人びとからなるのです。

このロジックは、ある意味で、殺人を正当化しているわけです。それには前提として、不法な迫害というのがあります。それを排除するために武力で抵抗している。反撃のための武力と、最初に攻撃をしかけた武力とは、意味が違うんです。

ね。こうして、武力による反撃を肯定するという論理が、キリスト教にそなわったのだと思う。島田——ルターはたしかにそのような考え方をとったかもしれませんが、それは軍人が殺人を日常的に行なわざるを得ないという現状を肯定するための正当化にすぎないのではないのでしょうか。橋爪——そうではなくて、もっと積極的に、封建社会の現状をつき破る、近代的な権力の正統化の道を開いたのです。

ある種の殺人を正当化するとすると、人の殺し方をいろいろ区別しないといけなくなります。キリスト教はもともと、自殺を禁止していましたが、それも織り込んで、殺人の「スペクトル」みたいなものができた。

ひとくちに人を殺すと言っても、いろいろな場合があるんです。

罪の軽そうなほうから順番に言えば、まず、事故。自動車事故のように、人を死なせるつもりがなくとも、不注意で、車が凶器となって、結果的に誰かが死んでしまった。日本語では「自動車事故で死んだ」と自動詞を使いますが、英語では「Be killed in a car accident」すなわち「自動車事故で殺された」と他動詞表現になる。じゃあ誰が殺したんだと、責任追及モードになる。ただし英語には、人を殺すという動詞にもいろいろあって、事故の場合、いわゆる謀殺 murder ではなくて、殺す意図がなかった場合に使える kill という言葉を使います。事故は過失で、殺す意図がありません。殺した本人も困っている。だから責任は軽い。でも過失だから、責任はある。

正当防衛というのがあります。襲われて危険を感じ、身を守るためにとつさに相手を攻撃した。その結果、相手は死んでしまったけれども、さもなくば自分が死んでいた。こういう場合、人を殺しても、その責任を追及されることはない。

それから、戦争。戦争は、相手を死なせているわけだが、それは職務によるので、相手に対する個人的な恨みといったものはない。それに、フェアである。相手（敵）も武器をもっていて、自分を殺そうと狙っている。自分が相手を殺すチャンスがあるのと同様、相手にも自分を殺すチャンスがある。自分が相手を殺したとしても、それはたまたまそうなのであって、自分が殺されていなくてもいい。自分の生命を危険にさらしている点で、道徳的な行為だと言える。戦争には戦争のルールがあって、軍服を着て、指揮官の命令に従い、武器を携行し、国際法にしたがって行動しているのです。

戦争と少し似ているものに、死刑執行がある。職務によって人を死なせるという点が似ています。違うのは、死刑を執行する人間は殺されるリスクがなく、自分の生命を危険にさらしていないこと。また、死刑になる人間は、殺されても当然な理由があって、正規の裁判で有罪になっている。

その次に、自殺。自殺は、そうしなくてもいいのに、自分の生命を自分で奪うという殺人なのですが、殺す者と殺される者が一致しているため、犯人が死んでしまっていて責任を追及できない。道徳的にいけないとされていて、法律上の犯罪にならない。

テロリストがアメリカを攻撃するのを放置したことによって、テロリストの共犯という責任をもつことになる。そこでアメリカは、その国家に対して自衛権を発動し、その政府を排除する権利があるというわけです。そういうことで、ついでにテロ組織も排除できる。こういう反撃のための戦争に訴えることは正義である。——これが、キリスト教にもとづいたアメリカの考え方だと思います。この論理と考え方は、たいへんに明快です。また国際法（ハーグ陸戦法規をはじめ、捕虜や民間人の保護の扱いを定めた一連の国際法規や慣行）にも合致しているのではないかと思います。

島田——その場合の国際法規というのはテロを規定しているということですか。  
橋爪——国際的な武力行使が合法とされる場合を規定しているわけです。それに合致しなければ、不法な武力行使ということになり、武力で反撃されても文句は言えません。テロも不法な武力行使の一種なのです。

国内法としてみた場合、テロは刑事犯罪です。刑事犯罪には、罪刑法定主義の原則が適用されるべきです。近代国家は、刑法（もしくは刑事罰を含む関連法規）の明確な条文によるのでなければ、有罪とせず、起訴せず、処罰せず、処刑しないという原則です。犯罪としてのテロは、当事国がそれぞれの刑法で裁くべきなんです。国際犯罪の場合も、犯人をつかまえて、犯罪が発生した国家に犯人を送り返して裁判にかけるといって、国内犯罪に準じて処理するのが望ましい。でも、テロ支援国家があって、犯人の引き渡し

その次にはいいよ、ふつうの殺人。夫に保険金をかけて殺してしまおうとか、憎らしい誰かを刺し殺してしまったとか。これは、邪悪な殺人です。自分勝手にふるまって、他人のことなどどうでもよいと考えるので、こうした被害が起こる。けれども、殺す相手は無差別ではなく、目的があつて特定の相手を殺している。犯人もつかまりたくないから、何喰わぬ顔で、ふつうの市民になりすましていて。ですから、犯人と無関係な人びとには危害が及ばない。自分も殺されるのではないかと心配しないでいい。というわけで、ふつうの殺人は、邪悪な行為であるとしても、社会秩序を根本から覆すわけではない。

この枠に収まらない、もっとも恐ろしい殺人が、テロリズムです。テロリズムは、特定の個人が憎くて殺すわけではない。相手は誰でもいい。人間を殺すこと自体が目的で、つぎは誰が殺されるのかわからないという恐怖（テロル）の混乱状態を生みだす。テロリズムはこれを狙っているわけですが、このことによって大きな政治力を手に入れようとする。中立を認めないわけですから、軍人や政府機関の職員はもちろんのこと、民間人など無関係な人びとも無差別に殺害する。この点で、テロリズムは非難すべきなのです。神を恐れぬふるまい、人類に対する犯罪であるとされる。別に宗教や思想を持ち出さなくても、無差別に大勢の人びとを殺すなんて、よくないことに決まっています。

こういう殺人の「スペクトル」のなかで、キリスト教徒は、より悪質な殺人に対抗するために、はおろか、犯人の逮捕や捜査も不可能となっている場合、以上のような方法がとれません。そうすると、テロの被害国は、国際法に訴えて、いわば反撃というかたちで対応するしかない。つまり戦争です。

島田——でも、それはあくまでもアメリカの論理ですよ。橋爪さんの議論は結局、九月十一日に被害をこうむった側だけのことを問題にしている、中東の現実、パレスチナの現実といったものを無視していることになるのではないのでしょうか。それではハナフィー教授の問題提起に答えたことにならないと思います。ですから、いくらアメリカの論理を再構成したとしても、もう一つの側、中東の側の問題というものはまったく議論になつてこないのではないのでしょうか。

橋爪——中東世界はたしかに、さまざまな問題を抱えています。そして、アメリカの外交政策・中東政策が、あまりに単純な図式に沿って展開しているようにみえる場合もあります。でも、そのことと、今回のテロ事件とは、別個・独立のことではないでしょうか。アメリカの中東政策とは別に、テロに対するアメリカの論理があるのです。島田——そのアメリカの論理を、もちろん受け入れる国もあるわけですが、九月十一日の事件は明白にテロだということになる。ところが、その一方で、その論理を受け入れず、九月十一日の事件はテロではない、少なくともテロと言わずに、アメリカのしてきたことの方がよっぽどテロなのではないか、そう考える国もあるわけですよ。その問題はどのようなのでしょうか。

より罪の軽い殺人に訴えることは正当であるという論理を編み出した。警察とか軍人とか、職業的に暴力をふるう人間が、悪質な殺人を抑止したり、犯人を処罰したりするために人を殺すのはかまわないという論理です。殺人そのものは悪かもしれないが、大きくみれば、悪を減少させ善を拡大する努力であるというわけですね。

#### アメリカ側の論理

橋爪——さて、今回の事件は、不特定無差別の人びとを攻撃の対象にしているという意味から言つて、テロリズムそのものであり、その規模もすさまじい。

テロリズムも犯罪ですから、もしも可能であれば、犯人を検挙して正規の裁判にかけるといのが適法な手続きなんです。けれども、国外に活動の拠点を置く国際的な事件であるために、国内の通常の法的手続きを取るだけでは解決できない。また、事件を起こしたのが外国の正規軍や政府組織であれば、戦争に訴えればよいのですけれども、正規軍でもない。ではどのように対抗措置を講じたらいいのかわからないのか。

そもそもこのテロリストたちはかなりの準備と訓練をして、組織的に行動しているわけですが、そんなことができるのは、テロを非合法として取り締まらない、むしろあべこべにそれを支援するような国が、アメリカ国外に存在するからである。これがテロ支援国家なんです。このようなテロ支援国家というものが存在したから、はじめて今回の事件が可能になっている。テロ支援国家は、

橋爪——どの国が認めないのでしょうか。

アメリカはアフガニスタン攻撃のまえに、いろいろ外交的な手を打った。イギリスのブレア首相も飛び回って、関係国の了解を取り付けました。サウジアラビアの了解はもちろん大事ですけれども、今回はまず鍵になる国として、パキスタンがある。この国は決定的に重要。もともとタリバンは、パキスタンとつながりが深いのです。で、パキスタンはアメリカの説得（というか圧力）に応じて、国内の混乱が深まるという代償を払つても、アメリカに同調しました。次にイラン。国境を接し、アフガニスタンからの大量の難民を抱えるイランも非常に重要な国です。イランとアメリカの間には、いろんな経緯や力学があるが、イランはもともと反タリバンだということもあって、国境線を封鎖したり、アメリカに協力して行動しています。ただアメリカもうっかりして、イランを「悪の枢軸」と呼んだりしたので、話はあとでちよつとこじれてしまいました。が、それまではイランの側も協力的だったし、スムーズに進んでいました。

そのほかの関係国も、アメリカに同調しています。中国もそうですし、ロシアもそうです。あと、ロシアの周辺国であるウズベキスタンそのほかの国々も、アメリカに同調しています。インドネシアなど、アフガン作戦と関係のうすいところは、直接当事者でないためか、あんまり熱心に説得できていないと思えませんが、少なくともアフガン戦争の主要関係国は、アメリカの論理に理解を示して動いているのではないだろうか。もち

ろん日本も入ります。

島田——少なくとも、悪の枢軸の一つとされたイラクの場合には、このアメリカの論理に従って動いてはいけませんね。

橋爪——イラクは、アメリカの論理には従いにくいでしょう。テロ支援国家とみなされて、現に経済制裁を受けている。アフガニスタンのタリバン政権そのものもそうです。国家としては、これらの国々だけじゃないですか。もちろん、民間の団体が各国でいろいろ騒ぐということはあります。

#### 冷戦終了後のテロ

島田——では、サウジアラビアの場合はどうなるのでしょうか。オサマ・ビンラーディンは、サウジアラビアの出身で、その国の豪族の一員であるわけですよね。そうしたテロリストを生み出し、また経済的な支援をしてきたサウジアラビアはテロ支援国家ということにはなりませんか。

橋爪——ある国がテロ支援国家であるかどうかは、状況によって判断されるんです。

冷戦の時代、じつはアメリカも、テロ支援国家と似たような活動をしていました。サウジアラビアやパキスタンを足場に、アフガニスタンに反ソ連のゲリラを送り込んでいました。でも、冷戦が終結して、そういう必要がなくなりました。ポスト冷戦の時代になってもまだこういう活動を行なっていたら、テロ支援国家なのです。

島田——テロということばは、状況に応じて、適用する範囲が変わるといえることですね。アメリカ

がかつて行なっていたことは、今ならテロと呼ば

れる可能性があるけれども、ソ連と対峙していた冷戦下では、むしろ自由主義圏を守るための正当な行為として、少なくとも自由主義圏では考えられていた。もちろん、逆に自由主義圏と対峙していた共産主義圏では、むしろそれは自分たちに対する攻撃としてとらえられていた。つまり、テロということばの背景には、それぞれの時代の世界情勢が密接にかかわっている、そう理解していいですね。

橋爪——そこはもう少し慎重に議論する必要がありますね。

ソ連アフガン戦争のときに、アフガニスタンのイスラム教徒が武器をとり、ゲリラとして戦った。これは、アフガニスタンの自衛と独立のための戦いとも言えます。また、周辺国から多くのイスラム主義者が、ゲリラに養成されてアフガニスタンに送り込まれた。裏でアメリカがそれを支援していた。ソ連に言わせると、これはテロかもしれないが、目標がソ連軍とその軍事施設に限定されているのなら、テロとも言えないわけです。

この事情をどういうふう理解するかによるのです。簡単に言える問題ではないので、ゆっくり議論したいと思います。

島田——今回の九月十一日の事件がきわめて衝撃的であったことが一つの大きな理由になっていると思います。多数の一般市民が犠牲になったことでテロということばを使いやすい状況が生まれている。けれども、むしろこれは例外的なことではないでしょうか。

な言い方がありますけれども、要するにテロリズム

の戦術をとるグループそのものが、平和と国際秩序にとつての最大の脅威であると思われようになった。国際社会は、安全保障上の課題として、テロリズムに対抗する戦いに取り組まなければならないということになってくるわけです。アメリカはそういうふうに変遷を遂げているわけですね。

島田——戦後の世界の動向に決定的に影響を与えていた冷戦というものが崩れた。一時はそれをもつて、自由主義圏が勝利をおさめて世界に安定した秩序がもたらされたという議論もあったと思います。しかし、冷戦構造の崩壊というものが本来に世界に平和と安定を与えたとはいえない状況が生まれつつある。現に中東の諸国でも王政や独裁政権によって支配されている国々があり、そうした国々では政権を批判する勢力がいて、実際に反政府の運動を展開しているわけですね。

アメリカは、そういう状況が生まれたとき、石油の安定した供給を確保するということで、独裁的な政権を支持し利用することがあるわけですね。また、かなりの国が、九月十一日の事件をテロと認定したということは、たしかにそうだと思います。テロという認識が先にあったかと言え、必ずしもそうとは言えない面があるのではないのでしょうか。今回、アメリカがビンラーディンを匿しているアフガニスタンのタリバン勢力に対して報復攻撃を行ないましたが、その際に、中央アジアの諸国が、これは旧ソ連の国々であるわけですが、アメリカ軍の駐留を許すという事態が生まれました。それを、ロシアも容認したというか、

橋爪——そうではなくて、冷戦が終わったことで、

世界の平和に対する主たる脅威のあり方が変わったんだと思います。

冷戦時代は、米ソ両大国の戦略核兵器の破壊力が、平和に対する主たる脅威でした。その脅威がどう抑えられていたかという点、核軍縮ではなくて、あべこべに核軍縮によっていた。相手国が先制攻撃をしかける動機がもてないくらい、反撃能力を高める。人類を何十回も殺せるほどの大量の核兵器を両国が保有するという、恐怖のバランスによって平和が維持されてきた。このバランスを崩してしまおうとする試みが、平和に対する脅威になってくるわけですね。

核戦力が行使できないので、通常戦力によるいやがらせ、朝鮮戦争とか、ベトナム戦争とか、それから下つてはアフガン戦争とか、こういうものが起こりはじめた。アメリカが一貫してとつてきた戦略は、ソ連の存在自体が間違っている、だから解体するというものでした。ソ連が共産主義イデオロギーを信奉して、アメリカに反対していること自体が間違いだし、その国がアメリカを破壊できる核戦力をもっているということが間違いで、世界がその結果二つに分断されているということ、その自由世界のなかには日本も入っている。

アメリカはそういう方針で、持久戦を構えた。で、何をしたか。いろいろありますが、ひとつは、中国との同盟関係。これは大きかった。ニクソン、キッシンジャーの戦略ですね。もうひとつは、ソ

積極的に認めた。

では、なぜそういうことになるかと言え、中央アジアの諸国はアメリカ軍を駐留させるかわりに、アメリカからの経済的な援助を受けることを期待した。そうした利害があるから駐留を認めたのであって、そこに中央アジア諸国の経済的な遅れというものがかわつていた。そのように見れば、テロという認識の背後には、利害というものがある。深くかかわっていたと言えるのではないのでしょうか。

橋爪——国際政治とはそういうものではないでしょうか。

島田——そういうものですか。橋爪——国際政治は、もちろんリアリズムに立脚している。リアルポリティクスでは、自国の利益に反するようなことを、道徳的に正しいと思っただけで行なうわけはありません。けれども、国際政治、国際社会に道徳がまるでないかと言え、それは違う。国際社会に道徳みたいなものがあるとするならば、それは、各国の利益がなるべく広い範囲で認められて、守られて、そして、武力紛争が起こってどこかの国が悲惨な状態に陥ることがないように戦争を抑止していく。そういうパワーバランスを維持することによって平和を維持するという努力が、道徳的にも正当なことなのじゃないでしょうか。それに失敗すれば、武力紛争が起こるわけですね。

いまは、そういう文脈がなくなりました。で、テロリズムという戦術技法だけが突出している。それを正当化できるかと言つて、かつてそうした戦術・戦略を正当化していた冷戦という文脈は存在しないわけですね。そうすると、今度は安全保障の優先順位が変わって、非対称な脅威とかがいろいろ

いる人はかなりいるのではないですか。

橋爪——ソ連のアフガン侵攻当時、アメリカの後押しでもって、ゲリラやコマンドとして危険な任務についた人びとが、戦争が終わると用済みになって、失業した。武器弾薬や破壊活動の技術、資金、人的ネットワーク、イスラム主義の信念をもった人びとです。こういう場合に誰を恨むかと言えば、ソ連ではなくてアメリカだということは、十分ありうることでしよう。アメリカだってそれをまったく予期していなかったかと言えば、そんなことはなく、いちおう警戒はしていた。まあ迂闊だったということでは。

#### テロと殉教

島田——そうした歴史的な背景があるとすれば、九月十一日の事件を単純にテロと呼んでしまうことは、そうした過去にアメリカがやってきたことを隠蔽する作用を果たしているのではないのでしょうか。

橋爪——隠蔽するなんてことはないでしょう。アメリカがなにをしてきたか、書店に行けばその本が山積みになっています。私だってはつきり、隠蔽しないで述べたではないですか。

島田——橋爪さんがなさった作業は、あくまでアメリカの論理を再構成するというものであって、その論理の普遍性は必ずしも保証されていませんね。それで、国際政治上の問題として、テロということばを使うことが、一つの免罪符的な役割を果たしているのではないかと感じます。

橋爪——免罪符と言うからには何かを告発したい

わけだし、隠蔽というからには何かを暴露したいわけですね。つまり、あるスタンスをとらないかぎり、アメリカの言い分を覆すことはできないはずなんです。だったら、そんなふうな質問をするばかりじゃなくて、島田さんのほうから、それに代わる見解を提出していただかないと、議論にならないと思います。

島田——アメリカの論理というものも、あくまである一定の立場の正当性を強調する一つのイデオロギーなのではないでしょうか。少なくとも、日本から見れば、そのように見えてくる。もちろん、世界貿易センタービルを破壊した人間たちのよって立つ思想や信仰があったとしても、それもまた一つのイデオロギーということになってくるわけですが。

学者、研究者といった知識人は、それぞれの社会において、常識として考えられ、議論の対象とならない事柄を、改めて宗教なり、イデオロギーなりとしてとらえ直し、その問題点を指摘することを役割としているのではないかと思うのです。

にもかかわらず、橋爪さんの議論は、イデオロギーをイデオロギーとして抽出するのではなく、むしろそれを私たちが従わなければならない論理として主張されているように感じられるのですが、いかがでしょうか。

橋爪——A国とB国が争っている場合、どちらの立場や利害も、なんらかの価値前提から出発している。だからどちらにも「イデオロギー」だと言っならば、そういう発言はいいじゃないかという価値前提に立脚しているのか。島田さんの言っているの

彼らがなぜ自爆をいとわないかと言うと、それは、自分たちの帰属する共同体があるからです。自分の命を投げ出してもそれが報われると感じられるだけの大勢の人びとが背後にいる。みんなの利害がかかっている、みんなが正義と信じているという、後押しがあるんですよ。ですからつきつきに「殉教者」を生んでいる。彼らは、事前にビデオで決意を表明したりして、共同体に訴えている。法に照らせば犯罪者であるかもしれないが、しかし、共同体のなかでは英雄として受け入れられる。

それだけの条件が、アルカイダグループのテロリストにありますか。彼らは、ある者はサウジアラビアから、ある者はまた別の国から、寄せ集まった主としてアラブ系の傭兵であって、コマンドとして訓練を受けて、そしてその道のプロとなった。そういうアフガン戦争のベテランの指導のもと、インテリでもともとドイツの理工系の大学で勉強していたとか、どこから見ても普通の大学院生ですとか、そういう人たちがこっそり飛行機の操縦練習をしたりなんかして突っ込んでいます。そんな人たちが実行犯には多いんですけど、大学に進学したりするというのは、恵まれて、比較的裕福である人びとではないのか。パレスチナの奪い尽くされ、迫害されているという人たちはたいへん遠くにいる。むしろ日本の赤軍派とか、オウム真理教とかと共通する部分のあるグループではないかと思う。だから、ずいぶん違うんです。

島田——ということは、逆に、パレスチナで起こ

は、単なる価値相対主義です。国際社会は、なんらかの価値にコミットしなければ、秩序形成ができないものなんです。

島田——知識人は本質的に価値相対主義であるべきではないでしょうか。社会で常識とされている考えや思想というものが決して絶対的なものではなく、様々な問題をはらんでいることを明らかにしていく。その役割を果たすことができなければ知識人としての存在に意味はないのではないのでしょうか。

そうしたことから、九月十一日の事件をテロと呼んで、少しもあやしまない世論に対して、果たしてテロと言い切れるのかという問題提起をする必要があると思うわけですが。

橋爪——テロでなければ、では何なのかを言うて下さい。

島田——たとえば、これは長くなってしまいましたが、「殉教の理念にもとづいた自爆によるアメリカに対する攻撃」といった言い方はできると思います。少なくとも、攻撃をする側には、テロではなく、殉教の認識があったと考えるべきでしょう。

橋爪——証拠がありますか。

島田——世界貿易センタービルに突っ込んだ人間たちが何を考えていたかは、今のところ知りようがないわけですが、先ほど申しましたように、パレスチナでイスラエルに対して自爆攻撃をしている人たちは、自分たちの行為をあくまで殉教としてとらえているわけですね。それと同じことが言えるのではないのでしょうか。

橋爪——それには反対です。9・11の同時多発テ

っていることは、テロとは呼べない。

橋爪——テロと呼んでいいんだと思いますよ。ですが、そこでは、どちらに正義があるかが五分五分であるような、有力な二つの立場がぶつかっているわけですね。

島田——それは力関係によって決まるということですか。

橋爪——正義は力を求めるが、力のあるほうが正義だというわけではない。

島田——赤軍派やオウムに似たところがあるのはたしかでしょう。それだけ、かれらが追いこまれていて、派手な行動に出るしかなかったという面があります。

ただ、九月十一日以降に、イスラエルがパレスチナの過激派に対する弾圧を強め、その結果、自爆攻撃が激化したということがありました。

それはパレスチナに限らず他の地域でも起こっていることで、テロという規定がなされることによって、反政府運動への弾圧が容易になっている面があると思います。

T

\*この対談は、三部構成中、第二部の一部です。第二部の以下に続く小見出しは次の通りです。

アルカイダの背景／パレスチナ問題の現在／イスラム原理主義とは何か／宗教と宗教は対立するか／政教分離と宗教的寛容／トルコにみる政教一致／宗教と国家・社会・経済との関係／日本人の宗教観

この対談は、二〇〇二年九月刊行予定の『宗教と戦争(仮)』(小社刊)に収録されます。